

目次

1. 調査の概要	1
1. 1 調査の背景と目的	
1. 2 調査の実施状況	
2. 調査対象の概要	3
3. 調査結果	6
4. 質問文と調査結果データ	19

図表一覧

- 図1：問19. 回答者の年齢
- 図2：問1. 発達に課題や心配がある子どもとの関わり方
- 図3：問2-1. 子どもの学年
- 図4：問2-2. 課題や心配の内容
- 図5：問2-3. 現在利用している行政施設
- 図6：問2-4. よく利用する相談先
- 図7：問3. 偏見や誤解
- 図8：問4. 差別や排除
- 図9：問5. 配慮や尊重の風潮
- 図10：問6. 社会参加
- 図11：問7. 学校での差別や排除
- 図12：問8. 地域住民の間での偏見や誤解
- 図13：問9. 就労活動での差別や排除
- 図14：問10～問12. 発達に課題がある子どもに対する行政支援の状況
- 図15：問13・問14. 発達に課題がある子どもが力を発揮できる環境
- 図16：問15～問17. 発達に課題がある子どもに対する地域社会の状況
- 表1：「保護者」と「それ以外」の平均値の差（t検定結果）
- 表2：「保護者」グループと「それ以外」グループの平均値・平均値の差

1. 調査の概要

1. 1 調査の背景と目的

習志野市では、障がいの有無にかかわらず、全ての子どもたちが自分らしく生きることができる社会を実現するための政策を推進している。この政策目的を達成するための具体的な取り組みとして、習志野市では、ひまわり発達相談センターを事務局として、こどもの発達支援に関わる庁内外の関係者による施策ロジック・モデルの策定と、ロジック・モデルを活用した協働型プログラム評価に取り組んでいる。

プログラム評価では、施策に対するニーズのアセスメント、施策ロジックの理論評価、施策展開の効率性・有効性に関するプロセス評価、などが行われるが、これらの評価を行うためには施策目的の達成状況を定期的にモニタリングし、評価情報を収集分析する必要がある。

子どもの発達支援というプログラム（一連の社会的介入活動）の効果と課題を把握するためには、市民・地域社会全体に効果が及ぶような通常の自治体の施策に関して行われるような、一般市民を対象とした社会調査からは有効な評価情報を得ることができない。子どもの発達障がいの問題は極めて重要な社会的課題ではあっても、多くの市民にとっては、発達支援施策の効果を評価できるほどの情報はないのが現状である。

本調査は習志野市における発達支援プログラムの質向上をねらいとするものであるため、発達支援に関わるステークホルダー（利害や関心をもつ人々）による評価が極めて重要になる。本調査で評価情報収集の対象とするステークホルダーとしては、①発達に課題や心配のある子どもをもち、支援サービスを受けている保護者達、②発達支援のための活動に従事し、支援サービスを提供している人々、そして③市の発達支援政策の分野で計画や施策の策定、実施、評価に関わっている人々である。（1）はサービス利用者、（2）と（3）はサービス提供者ということができる。

本調査の主な目的は、以下の2点である。

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">• 発達に課題のある子どもをもち保護者の現状や考え方を把握すること• 発達に課題のある子どもを支援する人々の現状や考え方を把握すること |
|--|

本調査はこのモニタリング調査の最初の試みであり、今後同じ調査が繰り返される場合のベースライン調査として位置づけられるものである。本基礎調査をもとに、今後の変化をモニタリングしながら、より実効性の高い施策の策定・実施を目指すものである。

1. 2 調査の実施状況

本調査での対象者数は以下のとおりである。

- ① 発達に課題や心配がある子どもの保護者：754 名
- ② 発達支援サービスの提供者：184 名
- ③ 市の発達支援施策に関与している人々：67 名

これら合計 1,005 名を対象として、同一内容の質問票によるアンケートを行った。アンケートの送付方法は、以下の 3 種類である。なお、回答は、調査票に同封された返送用封筒にて郵送するか、調査用に開設されたウェブサイトから回答するかのいずれかを選択できるようにした。

(1) 特別支援学級、特別支援学校に通う児童・生徒の保護者

各学校にて担当教員が、該当する児童・生徒に直接手渡しし、自宅で保護者が回答（複数の子どもがいる場合、書類を持ち帰った子どもについて回答）。

(2) ひまわり発達相談センター、あじさい療育支援センターを利用している保護者

各センターから対象となる保護者に郵送、あるいは手渡しし、自宅で回答（複数の子どもがいる場合、年長の子について回答）。

(3) 発達支援に関わる行政、学校、民間団体などの方々

対象者に職場住所宛に郵送し、個人として回答。

本調査の実施の前に、習志野市ひまわり発達相談センター職員、小学校の教頭、特別支援教育コーディネーターを対象にパイロットテストを実施し、回答所要時間の確認、質問文の表現の最終校正、などを行った。

本調査では、上記のとおり子どもによる保護者への持ち帰り、保護者への直接手渡し、あるいは郵送、によって調査票を含む調査資料セットを届け、郵送による回答回収、あるいはウェブによる回答回収を行った。最終的な回収数は 542 票（うち郵送返信 487 票、オンライン回答 55 票）、回収率は 53.9%であった。

本調査の企画設計、データ・セットの作成と集計・分析、報告書案の作成については、(株)公共経営・社会戦略研究所客員研究員の明治大学公共政策大学院ガバナンス研究科 北大路信郷教授と、同ガバナンス研究科 源由理子教授、東洋大学社会学部 米原あき准教授・専門社会調査士 から支援を頂いている。

なお、以下の報告に掲載している棒グラフでは、回答数の実数を示しているが、それぞれの%比率については「4. 調査結果データ」を参照して頂きたい。

2. 調査対象の概要

分析対象となった542名の回答者の男女比（問18）は、男性85人15.7%、女性456人84.1%（無回答1票）であった。回答者の年齢構成は図1のとおりで、30歳代（191人35.4%）と40歳代（186人34.4%）が回答者の約7割を占めている。

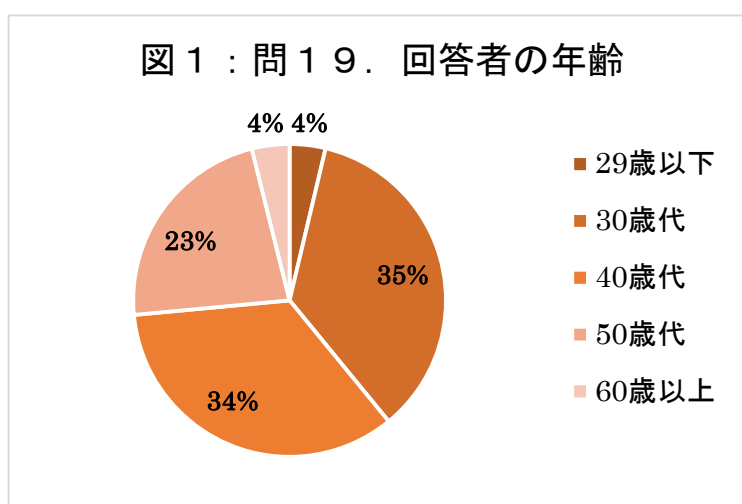
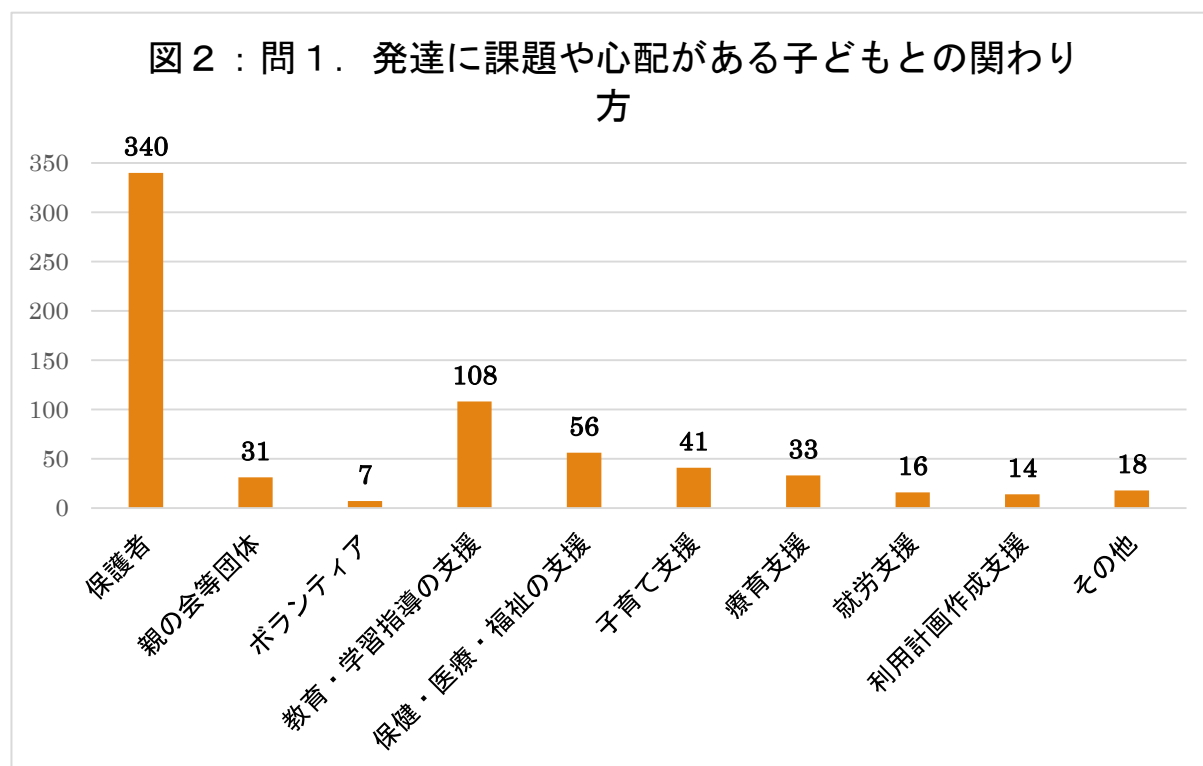
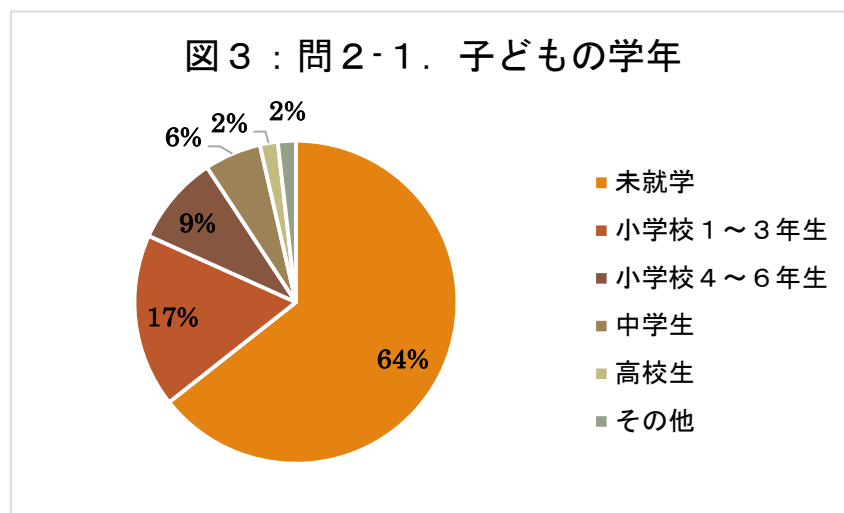


図2にみられるように、回答者の多く（340人62.7%）が発達に課題や心配がある子どもとの保護者であった（問1複数選択可）。



問1で「保護者」を選択した回答者には、問2において、課題や心配のある子どもの学年、課題や心配の内容、利用している行政施設、よく利用する相談先、について尋ねている。

まず、子どもの学年をみると（図3）、未就学児が215人64.4%、小学校1～3年生が58人17.4%、4～6年生が30人9.0%、中高生が25人7.5%と分布した。



これらの子どもの課題や心配事としては、人との関わりや言葉など、対人関係に関連する内容が最も多く、次いで学習面や集中力などに関する内容が続き、全体的な発達や運動面に関する内容も挙げられた（図4：問2-2 複数選択可）。

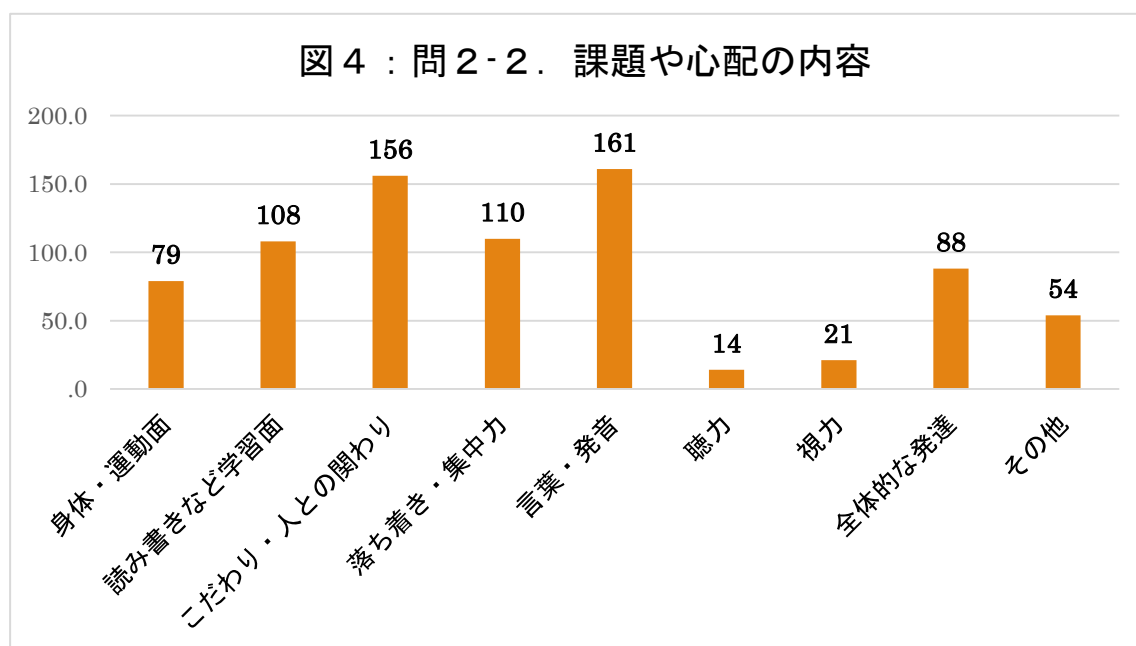


図5のとおり、本調査で対象となった発達支援サービス利用者の多く（210人 38.7%）はひまわり発達相談センターの利用者である。また、図6に示されているとおり、保護者達が「よく利用する相談先」としても、ひまわり発達相談センターやあじさい療育支援センターを含む「福祉施設」が最も多く（179人 33.0%）になっており、続いて、「保育所(園)・幼稚園・こども園」「学校・教育機関」「病院・医療機関」と、定常的あるいは定期的に利用する施設が主要な相談先となっていることが分かる。

図5：問2-3. 現在利用している行政施設

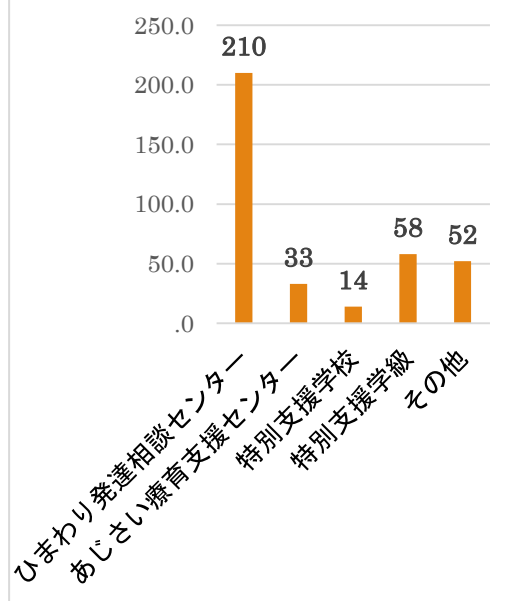
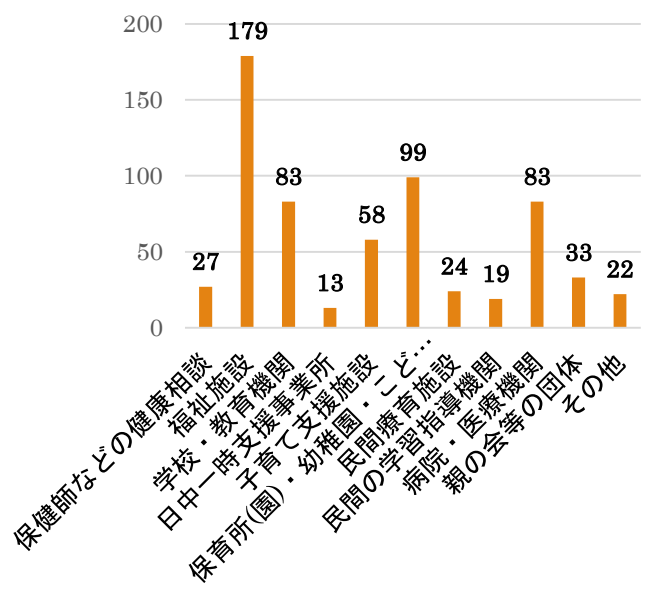


図6：問2-4. よく利用する相談先



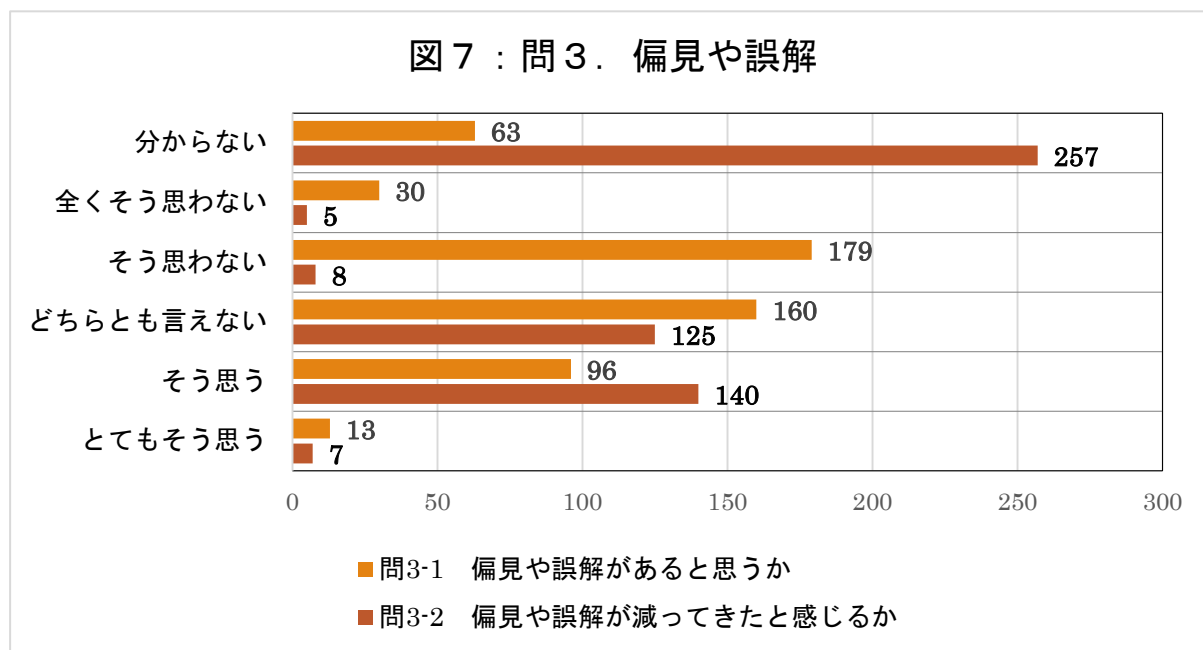
3. 調査結果

以下では、調査から得られたデータの記述と分析を行う。

問3から問9までは、発達に課題がある子どもが置かれている生活環境や社会状況を対象者達がどのように捉えているかを調べているが、各問とも、「現状についての評価」と「過去から現在までの変化（望ましい方向に改善しているか）」を尋ねる2つの問がセットになっている。これらの現状と変化をセットにした問については、以下の棒グラフ表示において、変化に関する回答が肯定側の場合は「そう思う、とてもそう思う」と読み替え、否定側の場合は「そう思わない、全くそう思わない」、また「以前と変わらない」は「どちらとも言えない」と読み替え、現状と変化を同一の評価軸と扱って、両者が対比できるようにしている。

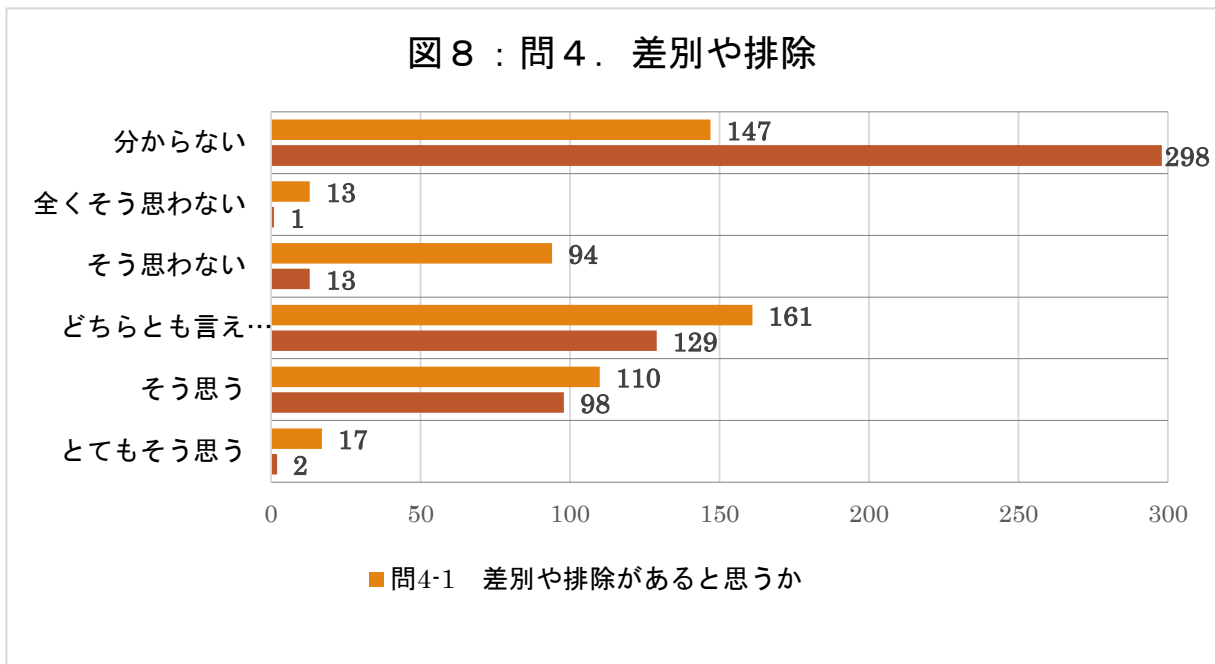
【問3】 偏見や誤解（図7）

習志野市において、発達に課題がある子どもに対する偏見や誤解があると思うかどうかについては、「そう思わない（179人 33.1%）」と「どちらとも言えない（160人 29.6%）」という回答が最も多かった。偏見や誤解が減ってきたと感じるかどうかについては、「分からない（257人 47.4%）」という回答が半分近くを占めたものの、4人に1人以上の回答者が「減ってきた」（図7では「とてもそう思う」と「そう思う」の合計 147人 27.1%）と肯定的で、「増えてきた」という否定的回答（合計 13人 2.4%）をはるかに上回っている。



【問4】差別や排除（図8）

習志野市において、発達に課題がある子どもに対する差別や排除（いじめなど）があると思うかどうかについては、「どちらとも言えない（161人 29.7%）」「分からない（147人 27.1%）」に次いで、「そう思う・とてもそう思う（127人 23.4%）」が「そう思わない・全くそう思わない（107人 19.7%）」を上回った。差別や排除が減ってきたと感じるかどうかについては、「分からない（298人 55.1%）」という回答が突出して多いが、「以前と変わらない」（図8では「どちらとも言えない」129人 23.8%）に次いで「減ってきた」（図8では「とてもそう思う」と「そう思う」の合計100人 18.5%）と感じる回答者が多い。

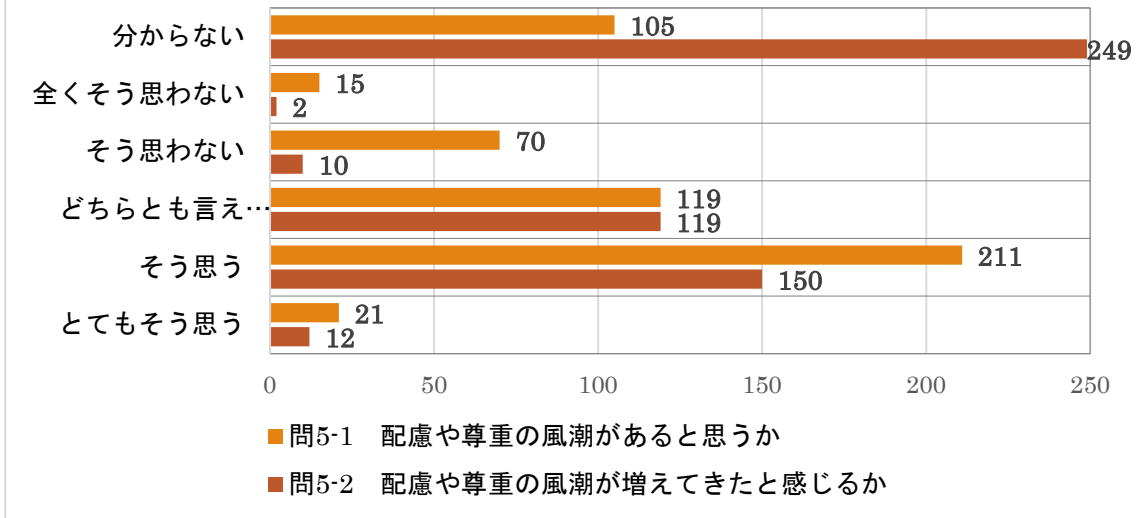


【問5】配慮や尊重の風潮（図9）

習志野市において、発達に課題がある子どもに対する配慮や尊重の風潮があると思うかどうかについては、「そう思う（211人 39.0%）」という回答が最多であった。「とてもそう思う（21人 3.9%）」と合わせた肯定的な見方（232人 42.9%）が、否定的な見方（「そう思わない」、「全くそう思わない」の合計85人 15.7%）よりもはるかに多いことがわかる。

また、配慮や尊重の風潮が増えてきたと感じるかどうかについては、「分からない（249人 45.9%）」という回答が半数近くを占めているが、これに次いで「増えてきた」（図9では「そう思う」150人 27.7%）という回答が多く、「とても増えてきた」（「とてもそう思う」12人 2.2%）と合わせると、肯定的回答が約3割（162人 29.9%）となる。

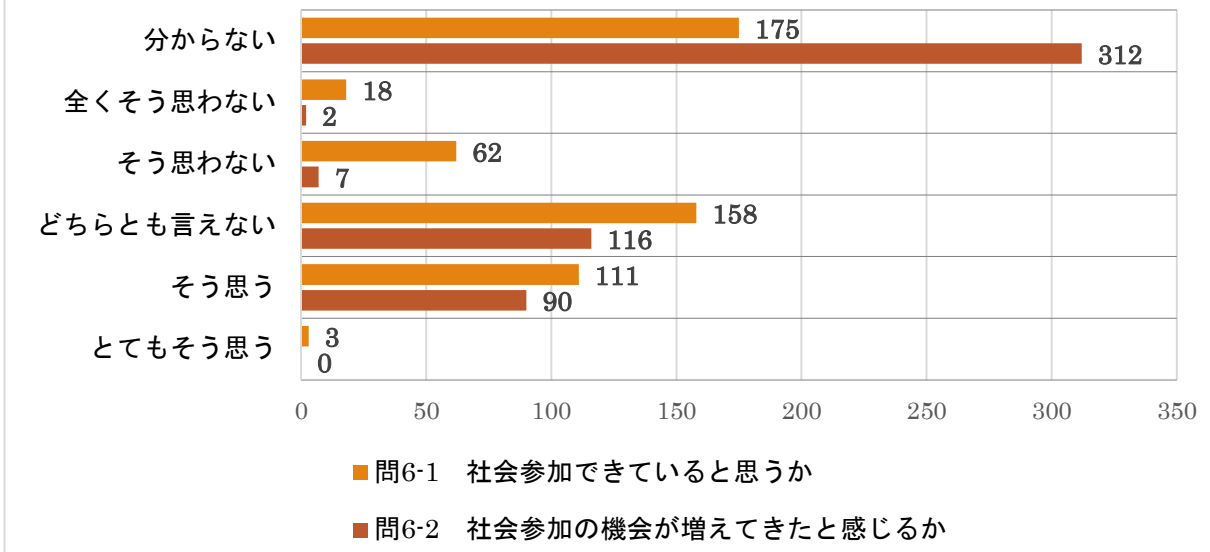
図9：問5. 配慮や尊重の風潮



【問6】社会参加（図10）

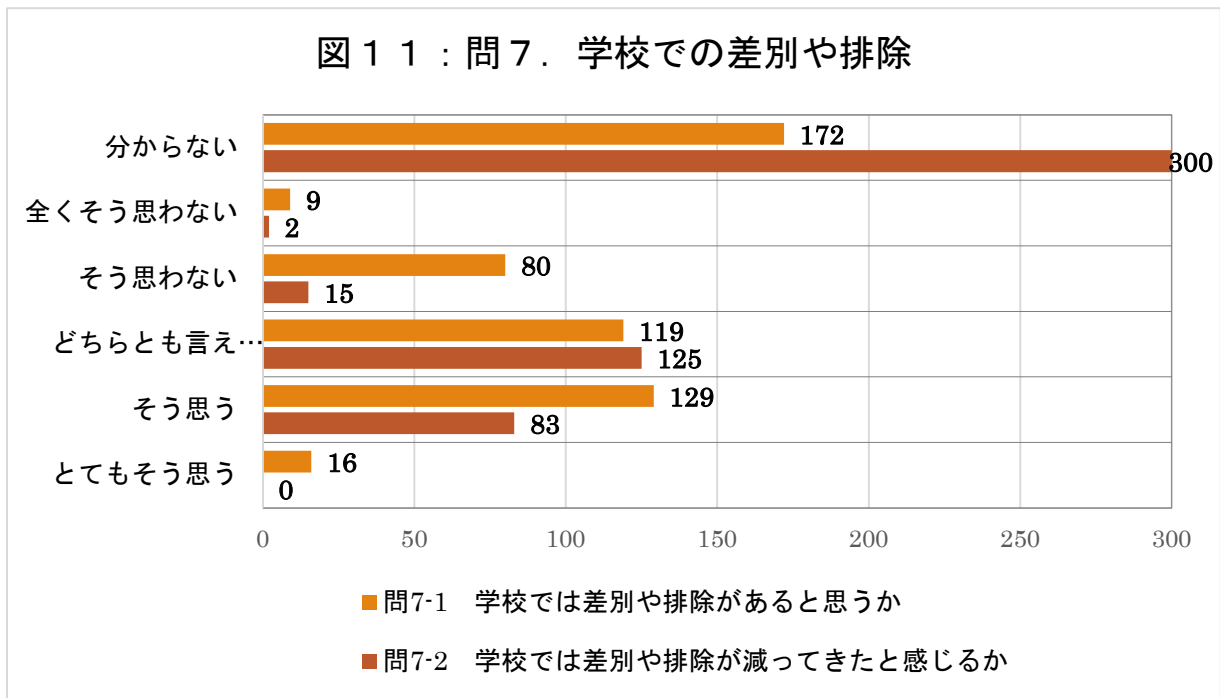
習志野市において、発達に課題がある子どもが社会参加できていると思う（「そう思う」111人21.1%と「とてもそう思う」3人0.6%）という肯定的な回答は114人21.6%にとどまっており、「分からない（175人33.2%）」「どちらとも言えない（158人30.0%）」という回答が多数を占めている。社会参加の機会が増えてきたと感じるかかどうかについては、「分からない（312人59.2%）」と「以前と変わらない」（図10では「どちらとも言えない」116人22.0%）という回答が合わせて8割以上を占めている。

図10：問6. 社会参加



【問7】学校での差別や排除（図11）

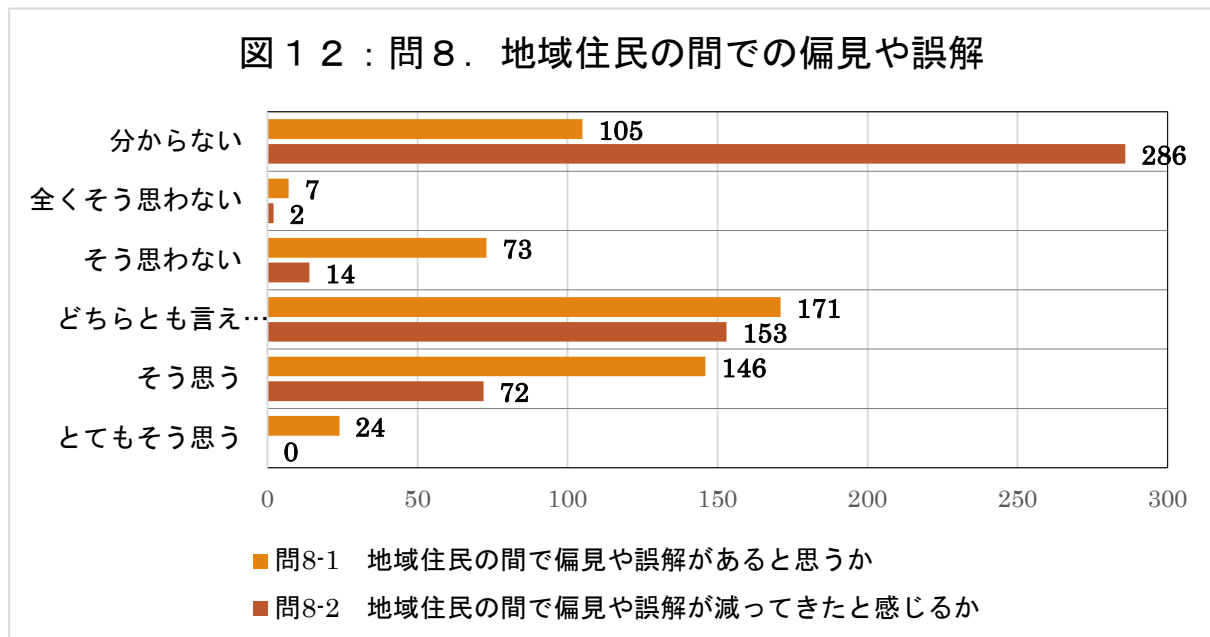
発達に課題がある子どもに対する学校での差別や排除（いじめなど）については、回答者に未就学児の保護者が多いことから、「分からない」という回答が多くなることが予想された。3人に1人が「分からない」と回答（172人 32.8%）しているが、肯定的回答と否定的回答を比べると、差別や排除がある（「そう思う」と「とてもそう思う」の合計 145人 27.6%）という回答が多く、差別や排除がない（「そう思わない」と「全くそう思わない」の合計 89人 16.9%）を10ポイント以上上回っている。また、差別や排除が減ってきたかどうかについては、「分からない」という回答が6割近く（300人 57.1%）を占めている。学校の状況を継続的に観察できる学校関係者以外には判断が難しいものと思われる。この約6割を除くと、減ってきたという肯定的な回答（「そう思う」83人 15.8%）が否定的な回答（17人 3.3%）を上回っている。



【問8】地域住民の偏見や誤解（図12）

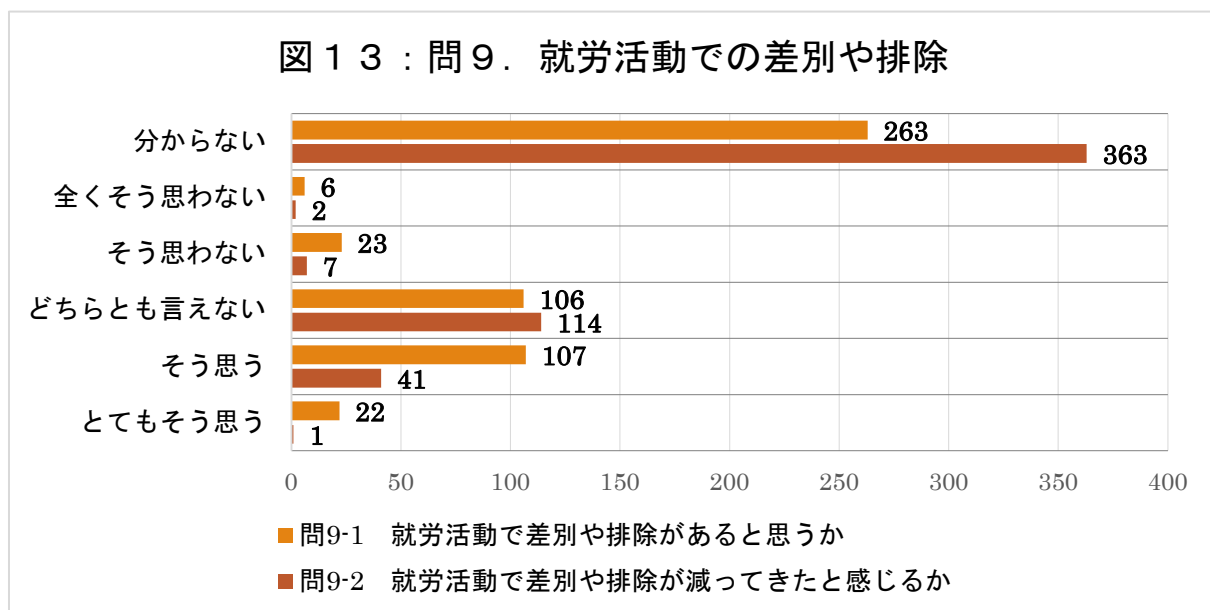
発達に課題のある子どもに対して、地域住民の間に偏見や誤解があると思うかどうかについては、「どちらとも言えない（171人 32.5%）」という回答に次いで、偏見や誤解があるとする回答（「そう思う」146人 27.8%）と「とてもそう思う」24人 4.6%）が多い。合計すると3割以上（32.3%）の回答者が地域住民の間に偏見や誤解があると思っており、誤解や偏見の存在に否定的な回答（合計 80人 15.2%）を上回っている。

地域住民の間の偏見や誤解が減ってきたかどうかについては、「分からない（286 人 54.3%）」と「どちらとも言えない[以前と変わらない]（153 人 29.0%）」が多数を占めた。



【問9】就労活動における差別や排除（図 1 3）

就労活動における差別や排除（いじめなど）についても、問8と同様の傾向が見られ、差別や排除があると思うかどうかについては、「どちらとも言えない（106 人 20.1%）」を除くと差別や排除があることを認める回答（「そう思う」107 人 20.3%と「とてもそう思う」22 人 4.2%、合計 129 人 24.5%）が多く、差別や排除の存在に否定的な回答（合計 29 人 5.5%）をはるかに上回っている。

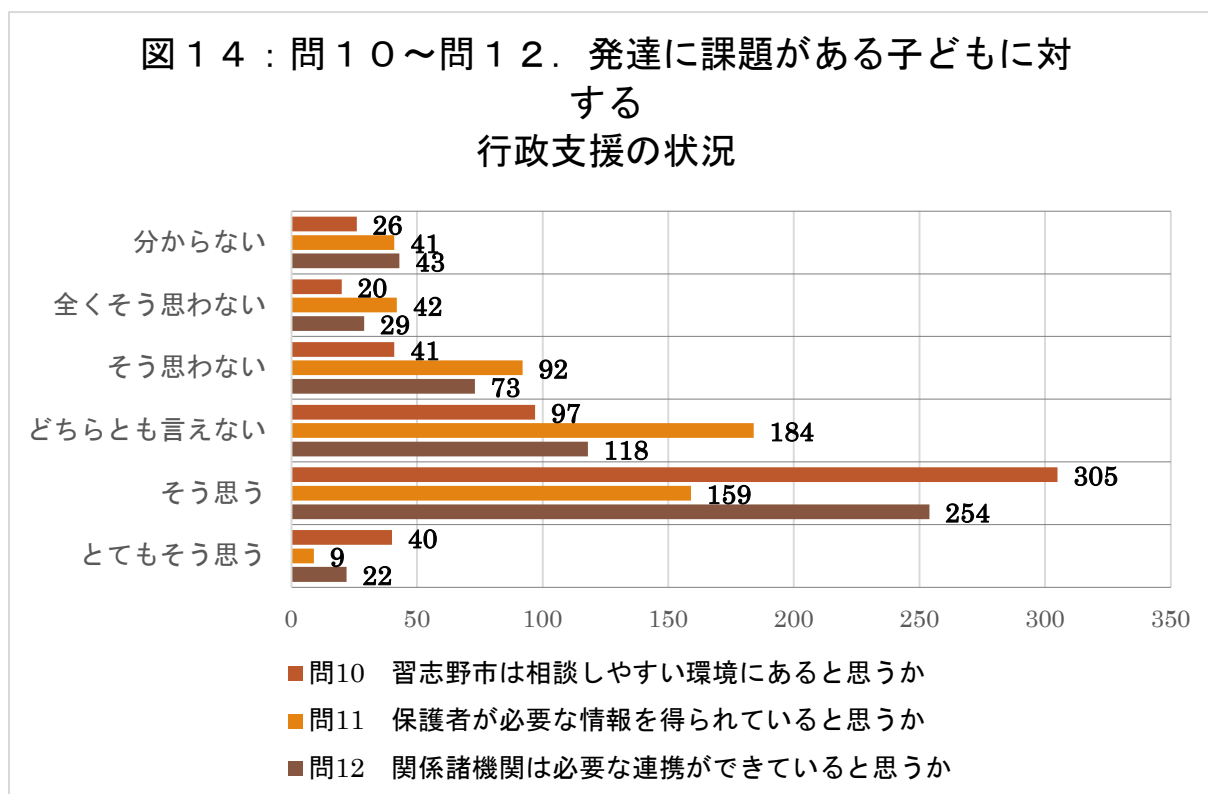


また、そのような差別や排除が減ってきたと感じるかどうかについては、「分からない(363人68.8%)」と「どちらとも言えない[以前と変わらない] (114人21.6%)」が大多数を占めている。

以上問7～問9の傾向をまとめると、学校での差別や排除があるとする回答が27.6%、否定する回答が16.9%、地域住民の間の偏見や誤解があるとする回答が32.3%、否定する回答が21.3%、就労活動での差別や排除があるとする回答が24.5%、否定する回答が5.5%、となっており、学校、地域社会、就労のいずれにおいても、発達に課題のある子どもが置かれている状況は困難なものを受け止められていることがわかる。特に就労についての困難さについては今後の取り組みが強く求められる。

【問10～問12】行政支援（図14）

発達に課題がある子どもに関する行政支援について、習志野市は困ったことを相談しやすい環境にあると思うかを尋ねたところ（問10）、「とてもそう思う」（40人7.6%）、「そう思う」（305人57.7%）という回答は合わせて65.2%で、相談しにくい（「全くそう思わない」20人3.8%、「そう思わない」41人7.8%）という回答（11.6%）を大きく上回った。

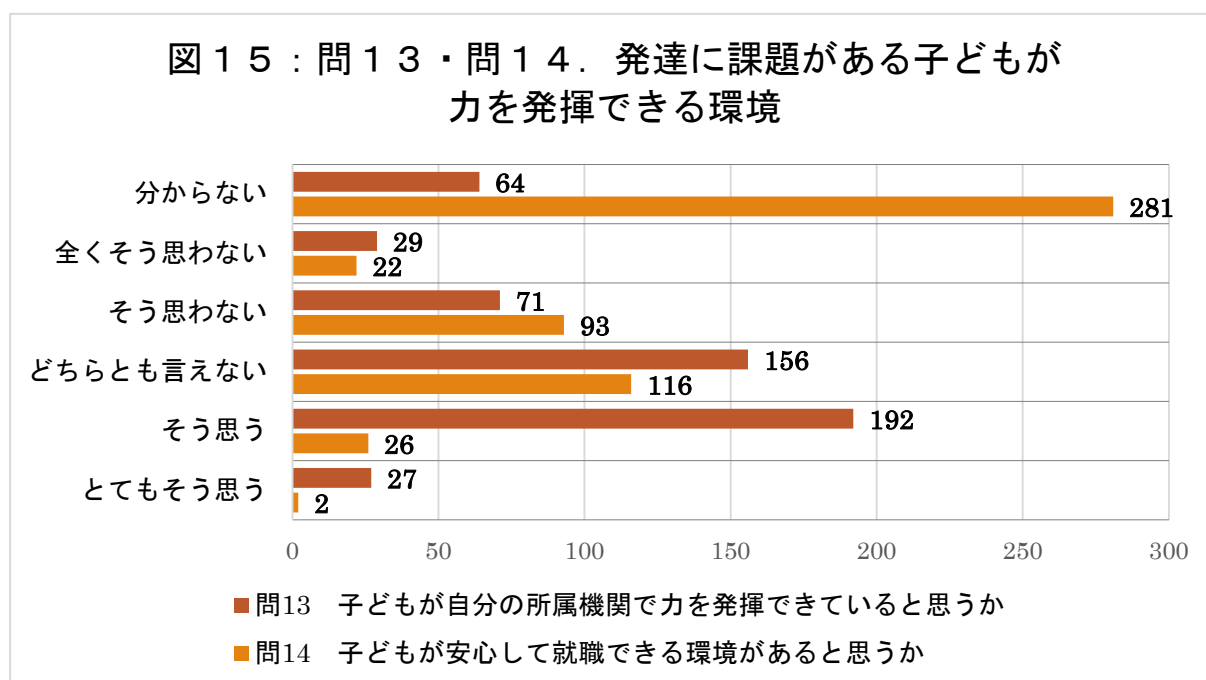


しかしながら、発達に課題がある子どもを持つ保護者が必要な情報を得られていると思うかどうかについては(問 11)、情報が得られているという回答(「とてもそう思う」9人 1.7%、「そう思う」159人 30.2%、合計 168人 31.9%)と、「どちらとも言えない」という回答(184人 34.9%)、情報が得られていないという回答(「全くそう思わない」42人 8.0%、「そう思わない」92人 17.5%、合計 134人 25.5%)にほぼ3分割される結果となっている。問 10で「習志野市は相談しやすい環境にある」という評価の回答が6割近いにもかかわらず、情報が得られているという回答が3割程度しかないことに注視すべきであろう。

また、発達支援に関わる諸機関の連携については(問 12)、必要な連携ができている(「とてもそう思う」22人 4.1%、「そう思う」254人 47.1%、合計 276人 51.2%)と答えている回答者が5割以上おり、否定的な意見(「全くそう思わない」29人 5.4%、「そう思わない」73人 13.5%、合計 102人 18.9%)を大きく上回った。

【問 13・問 14】力を発揮できる環境 (図 15)

発達に課題がある子どもの生活環境について、子どもたちが保育所(園)・幼稚園・学校など、それぞれの所属先で自分の持てる力を発揮できているかどうか(問 13)については、肯定的な意見(「とてもそう思う」27人 5.0%、「そう思う」192人 35.8%)が約4割(40.6%)、「どちらとも言えない」という回答が約3割(156人 28.9%)、否定的な意見(「全くそう思わない」29人 5.4%、「そう思わない」71人 13.2%)が約2割(18.6%)であった。

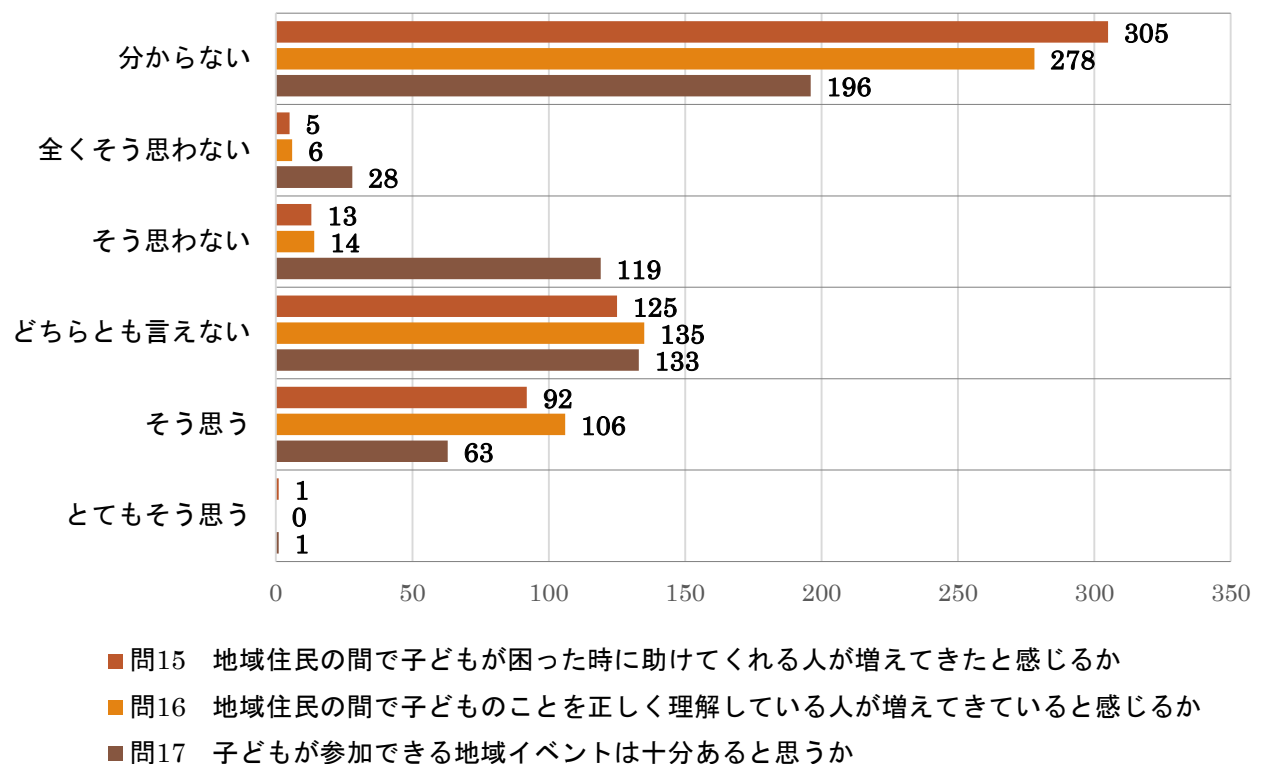


一方で、子どもたちが安心して就職できる環境があるかどうかを尋ねたところ（問 14）、肯定的な回答（「とてもそう思う」2人0.4%、「そう思う」26人4.8%）は、合わせてわずか5.2%に過ぎない。前の問 13 では保育所（園）・幼稚園・学校などで自分の持てる力を発揮できているという回答が4割程度あったにもかかわらず、これらの施設・機関を出たあとの社会状況は厳しいものであるという認識が明確に表れている。

【問 15～問 17】地域社会の状況（図 16）

発達に課題がある子どもに関する地域社会の状況については、問 15、16、17 の3問により回答者の考えを尋ねている。まず、地域住民の間で、発達に課題がある子どもが困った時に助けてくれる人が増えてきているか（問 15）については、増えてきたという肯定的な回答（「とてもそう思う [とても増えてきた]」1人0.2%、「そう思う [増えてきた]」92人17.0%）は合わせて17.2%にとどまっており、大多数（305人56.4%）は「分からない [以前と変わらない]」と回答している。

図 16 : 問 15～問 17. 発達に課題がある子どもに対する地域社会の状況



地域住民の間で、発達に課題がある子どものことを正しく理解している人が増えてきていると感じるか（問 16）についての回答も同様の傾向にある。理解している地域住民が増えてきていると感じる回答者（「とてもそう思う [とても増えてきた]」0人、「そう思う [増えてきた] 106人 19.7%）は2割弱にとどまっている。過半数（278人 51.6%）は「分からない」と回答している。

最後に、発達に課題がある子どもたちが参加できる地域のイベントが十分あると思うかどうか（問 17）を尋ねると、肯定的な回答（「とてもそう思う」1人 0.2%、「そう思う」63人 11.7%）は合わせて 11.9%に過ぎず、否定的な回答（「全くそう思わない」28人 5.2%、「そう思わない」119人 22.0%、合計 147人 27.2%）のほうが多い状況である。

以上見てきたように、発達に課題がある子どもが置かれている生活環境、社会状況に関する質問については、全般的に「分からない」という回答の多さが目立った。その理由の1つは、前掲の図3に示されているように、本調査の対象者の多くを占める保護者達の子どもの大半が未就学児で、これらの回答者達が子どもの発達に関する課題や心配を感じるようになってからあまり時間が経っていないことから、子どもが置かれている生活環境や社会状況、さらには行政の取り組みについて評価できるほどの情報を持ち合わせていないことが推測される。今後、様々な発達支援の取組みを行うことで、多くのステークホルダー達、さらには市民のもつ情報が増え、子どもの発達の課題に関する意識が向上し、「分からない」という回答が肯定的な回答に転じていくことが期待される。

【t検定】「保護者」と「それ以外（サービス提供者）」の平均値の差（表1）

以上の分析は、発達支援サービスを受けている保護者と、サービス提供側の人々を合わせた全ての回答者の回答をまとめて行ったものだが、サービスの受け手側と提供側との間には認識の違いがある可能性が高い。そこで、「問1」の「発達に課題や心配がある子どもとの関わり方」の回答結果から、回答者を「保護者」（問1で1を選択した回答者）と「それ以外」（1を選択しなかった回答者）の2つのグループに分け、これら2グループ間で、回答の傾向に違いがないかを分析した。

※ t 検定とは

2つのグループの平均値の差が、「単なる偶然」による差異ではなく、「統計的に有意な差」であることを確認するための検定方法を t 検定という。「統計的に有意な分析結果」であるかどうかは、「有意確率」によって示される。有意確率の値が 0.05 よりも小さい場合は、「2つの平均値に差があるように見えても、それは単なる偶然に過ぎない」という確率が 5%以下であることが統計的に裏付けられ、「2つの平均値の間に有意な差がある」と判断する。

統計的な有意差があるかどうかを判断するために、2つのグループのデータから「t 値」と呼ばれる指数と「自由度」と呼ばれる値を算出し、これらの値に基づいて有意性の判断を行う。一般的に、「t 値」が十分大きい場合、ふたつのグループの平均値の差は「統計的に有意」になる。

全設問のうち、t 検定による分析の対象としたのは、回答者の属性に関する「問 1」、「問 2」、「問 18」、「問 19」を除く「問 3～問 17」に含まれる 22 の設問である。選択肢「6. 分からない」という回答を除き、選択肢 1～5 の回答を得点とみなして両グループの平均得点を計算した。

ただ、22 の設問の中には、例えば「問 3-2. . . . 偏見や誤解が減ってきたと感じますか？」のように、選択肢の「1. とてもそう思う」や「2. そう思う」が「好ましい状況」であることを認める設問表現になっているものがある一方で、「問 3-1. . . . 偏見や誤解があると思いますか？」のように、選択肢 1 や 2 を選ぶことが「好ましくない状況」であることを認める設問表現になっているものも混ざっている。そのため、22 の設問に関する平均値が互いに比較できるよう、否定的な設問表現を使っている場合は、あらかじめ選択肢 1 を 5 点、選択肢 5 を 1 点とする「リバース（逆転）コーディング」を行い、尺度の方向性を同じにする処理を行っている。これにより、22 のどの設問においても、平均値が小さいほうが「より好ましい状況」という評価点になる。

表 1 は、「保護者」グループと「それ以外」グループの平均値の差について t 検定を行った結果である。平均値の差は、「保護者」グループの平均値から「それ以外」グループの平均値を引いた値だが、表 1 ではこの値のすべてがプラスで、「保護者」グループの平均値が高いという結果になっている。上述のとおり、平均値が小さいほうが「より好ましい状況」という

評価になることから、「保護者」グループは「それ以外」グループと比べ、「好ましくない状況」と評価する傾向があることがわかる。

表 1 : 「保護者」と「それ以外」の平均値の差 (t 検定結果)

問番号	t 値	自由度	有意確率	平均値の差 (保護者)-(それ以外)	平均値の差が 0.5 以上
問 3-1re	1.57	476.00	0.12	0.14	(有意差なし)
問 3-2	5.89	282.51	0.00	0.44	
問 4-1re	4.44	393.00	0.00	0.40	
問 4-2	9.06	240.19	0.00	0.62	✓
問 5-1	5.89	433.83	0.00	0.49	
問 5-2	6.14	291.00	0.00	0.45	
問 6-1	4.44	346.91	0.00	0.38	
問 6-2	6.35	192.15	0.00	0.48	
問 7-1re	4.23	326.69	0.00	0.41	
問 7-2	5.83	222.99	0.00	0.45	
問 8-1re	2.08	379.45	0.04	0.18	
問 8-2	6.02	228.18	0.00	0.42	
問 9-1re	5.67	262.00	0.00	0.56	✓
問 9-2	5.67	162.98	0.00	0.46	
問 10	4.80	500.34	0.00	0.35	
問 11	6.85	474.95	0.00	0.54	✓
問 12	5.34	489.07	0.00	0.44	
問 13	2.56	456.99	0.01	0.22	
問 14	5.83	248.26	0.00	0.55	✓
問 15	6.10	227.38	0.00	0.50	✓
問 16	6.05	259.00	0.00	0.48	
問 17	6.05	341.94	0.00	0.54	✓

(注 1) 否定的表現の質問文の回答はリバースコーディングし、

「1 = 最も望ましい状況」～「5 = 最も望ましくない状況」に統一した。

(注 2) 「6. 分からない」は名目変数であるため、上記の分析から外してある。

表 1 では、全ての設問について「保護者」グループの平均値が「それ以外」グループの平均値より大きくなっているが、t 検定の結果では、「問 3-1. 習志野市では、発達に課題がある子どもに対する偏見や誤解があると思いますか?」という問に限っては、「保護者」と「それ以外」のグループ間に統計的に有意な差異認められなかった。しかし、この「問 3-1」以外の全ての質問項目において、「保護者」と「それ以外」のグループ間に統計的に有意な差異が存在し、全ての質問項目において、「保護者」グループの平均値が有意に大きく、「保護者」

グループのほうが、「それ以外」グループよりも現状が好ましくないと見ていることが明らかになった。

特にグループ間の差異が大きい質問は、表中に✓印がある下記6項目である。

- ・「問 4-2. 差別や排除があると思うか」
- ・「問 9-1. 就労活動で差別や排除があると思うか」
- ・「問 11. 保護者が必要な情報を得られていると思うか」
- ・「問 14. 子どもが安心して就職できる環境があると思うか」
- ・「問 15. 地域住民の間に困った時に助けてくれる人が増えてきたと感じるか」
- ・「問 17. 子どもが参加できる地域イベントは十分あると思うか」

これらの質問では、「保護者」グループの回答が、「それ以外」グループの回答よりも、より強く否定的な傾向を示していた。

【保護者の心配】保護者グループに否定的回答の傾向が強い設問（表2）

上記平均値データから、発達に課題や心配のある子どもに関して、保護者が特に懸念を感じている生活環境・行政や社会の状況がどのようなものを伺うことができる。表2は、上記の表1の分析で用いた平均値データについて、「保護者」グループと「それ以外」グループのそれぞれの平均値を示したもので、(A)「保護者」の平均値の欄の数字を使って降順に並べたものである。平均値の数字が大きいほど設問文に対して否定的（全くそう思わない・思わない）であることから、この表の上位にある設問文にある社会状況等は、多くの保護者にとって「特に好ましくない状況にある」ことを示唆している。平均値 3.0 が否定的評価と肯定的評価の間であるため、「保護者」グループの平均値が 3.0 を上回る9項目は、保護者達が特に懸念している状況と見ることができる。

最も「好ましくない状況」という評価になっている1位の項目は、「問 9-1. 就労活動では、発達に課題がある子どもに対する差別や排除（いじめなど）がある」（リバースコーディング処理しているため、否定の否定で肯定になる）であり、2位「問 14. 発達に課題がある子どもが安心して就職できる環境がある」（全くそう思わない・思わない）とともに、就職の心配である。

(B)「それ以外」グループは発達支援サービスの提供者側の人々であるが、網掛けしている平均点 3.0 以上の項目をみると、「それ以外」グループでも「保護者」グループと同じような項目が上位に並んでいる。しかし、その平均値は「保護者」グループよりもかなり小さく、特に就職環境を含む上位の3項目では平均値の差が 0.5 以上の✓マークが付いている。懸念

が大きい項目は似ていても、その懸念の程度がかなり違うようである。今後、「保護者」グループの満足度や安心感が上昇し、「それ以外」グループの現状認識も変化し、両者のギャップが埋まっていくことが望まれる。

表2：「保護者」グループと「それ以外」グループの平均値・平均値の差
～ 保護者達に否定的回答の傾向が強い設問順 ～

問番号	設問内容	(A)「保護者」の平均値	(B)「それ以外」の平均値	平均値の差(A) - (B)	平均値の差が0.5以上
問9-1re	就労活動では、発達に課題がある子どもに対する差別や排除（いじめなど）がある [ない]	3.70	3.14	0.56	✓
問14	発達に課題がある子どもが安心して就職できる環境がある	3.69	3.13	0.55	✓
問17	発達に課題がある子どもが参加できる地域のイベントは十分ある	3.56	3.03	0.54	✓
問7-1re	学校では、発達に課題がある子どもに対する差別や排除（いじめなど）がある	3.36	2.95	0.41	
問8-1re	地域住民の間で、発達に課題がある子どもに対する偏見や誤解がある [ない]	3.32	3.15	0.18	
問4-1re	発達に課題がある子どもに対する差別や排除（いじめなど）がある [ない]	3.24	2.84	0.40	
問11	発達に課題がある子どもを持つ保護者にとって、必要な情報が十分得られている	3.19	2.65	0.54	✓
問6-1	発達に課題がある子どもが社会参加できている	3.12	2.73	0.38	
問9-2	就労活動では、発達に課題がある子どもに対する差別や排除（いじめなど）が減ってきた	3.05	2.59	0.46	
問8-2	地域住民の間で、発達に課題がある子どもに対する偏見や誤解が減ってきた	2.98	2.56	0.42	
問4-2	発達に課題がある子どもに対する差別や排除（いじめなど）が減ってきた [と思わない]	2.98	2.37	0.62	✓
問15	地域住民の間で、発達に課題がある子どもが困ったときに助けてくれる人が増えてきている	2.96	2.45	0.50	✓
問7-2	学校では、発達に課題がある子どもに対する差別や排除（いじめなど）が減ってきた	2.95	2.50	0.45	
問16	地域住民の間で、発達に課題がある子どものことを正しく理解している人が増えてきている	2.93	2.45	0.48	
問6-2	発達に課題がある子どもの社会参加の機会が増えてきた	2.90	2.42	0.48	
問5-1	発達に課題がある子どもに対する配慮や尊重の風潮がある	2.86	2.37	0.49	
問13	発達に課題がある子どもが各所属先（保育所、幼稚園、学校など）で持てる力を発揮できている	2.84	2.62	0.22	
問12	発達支援にかかわる関係諸機関は、適切な支援や情報提供を行うために必要な連携ができています	2.83	2.40	0.44	
問3-1re	発達に課題がある子どもに対する偏見や誤解がある [ない]	2.81	2.67	0.14	有意差なし
問3-2	発達に課題がある子どもに対する偏見や誤解が減ってきた	2.77	2.32	0.44	
問5-2	発達に課題がある子どもに対する配慮や尊重の風潮が増えてきた	2.69	2.24	0.45	
問10	発達に課題がある子どもを持つ保護者にとって、習志野市は、困りごとを相談しやすい環境にある	2.52	2.18	0.35	

(注1) リバースコーディングした否定的表現の質問文には末尾に [ない] を付けている。

(注2) 平均値が小さいほど肯定的（とてもそう思う・思う）な回答が多い。

(注3) 平均値が3.0を超えた場合（網掛け部分）は全体的に否定的傾向が強い。

4. 資料：質問文と調査結果データ

問1 あなたは、発達に課題や心配があるお子さんとのように関わっておいでになりますか。(複数回答)

N=542

	度数	パーセント
①保護者	340	62.7
②親の会等の団体	31	5.7
③ボランティア	7	1.3
④教育・学習指導の支援	108	19.9
⑤保健・医療・福祉の支援	56	10.3
⑥子育て支援	41	7.6
⑦療育支援	33	6.1
⑧就労支援	16	3.0
⑨サービス等利用計画作成支援	14	2.6
⑩その他	18	3.3

問2 (問1で「保護者」と回答した方のみ)お子さんについて伺います。

問2-1 課題や心配があるお子さんの学年は？

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効 未就学	215	39.7	64.4	64.4
小学校1～3年生	58	10.7	17.4	81.7
小学校4～6年生	30	5.5	9.0	90.7
中学生	19	3.5	5.7	96.4
高校生	6	1.1	1.8	98.2
その他	6	1.1	1.8	100.0
合計	334	61.6	100.0	
欠損値	208	38.4		
合計	542	100.0		

問2-2 どのような課題や心配がありますか？(複数回答)

N=542

	度数	パーセント
①身体・運動面	79	14.6
②読み書き計算など学習面	108	19.9
③こだわり・人との関わり	156	28.8
④落ち着き・集中力	110	20.3
⑤言葉・発音	161	29.7
⑥聴力について	14	2.6
⑦視力について	21	3.9
⑧全体的な発達	88	16.2
⑨その他	54	10

問 2-3 現在どのような行政施設を利用していますか？(複数回答)

N=542

	度数	パーセント
①ひまわり発達相談センター	210	38.7
②あじさい療育支援センター	33	6.1
③特別支援学校	14	2.6
④特別支援学級(小・中)	58	10.7
⑤その他	52	9.6

問 2-4 どのような相談先をよく利用していますか？(複数回答)

N=542

	度数	パーセント
①保健師などの健康相談	27	5.0
②福祉施設	179	33.0
③学校・教育機関	83	15.3
④日中一時支援事業所	13	2.4
⑤子育て支援施設	58	10.7
⑥保育所(園)・幼稚園・こども園	99	18.3
⑦民間療育施設	24	4.4
⑧民間の学習指導機関	19	3.5
⑨病院・医療機関	83	15.3
⑩親の会等の団体	33	6.1
⑪その他	22	4.1

◆発達に課題がある子どもに関して、習志野市の現状と最近の変化をどのようにご覧になりますか。

下記のそれぞれの問について、あなたのご意見をお聞かせください。

問3-1. 習志野市では、発達に課題がある子どもに対する偏見や誤解があると思いますか？

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	とてもそう思う	13	2.4	2.4	2.4
	そう思う	96	17.7	17.7	20.1
	どちらとも言えない	160	29.5	29.6	49.7
	そう思わない	179	33.0	33.1	82.8
	全くそう思わない	30	5.5	5.5	88.4
	分からない	63	11.6	11.6	100.0
	合計	541	99.8	100.0	
欠損値	システム欠損値	1	.2		
合計		542	100.0		

問3-2. 習志野市では、発達に課題がある子どもに対する偏見や誤解が減ってきたと感じますか？

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	とても減ってきた	7	1.3	1.3	1.3
	減ってきた	140	25.8	25.8	27.1
	以前と変わらない	125	23.1	23.1	50.2
	むしろ増えてきた	8	1.5	1.5	51.7
	とても増えてきた	5	.9	.9	52.6
	分からない	257	47.4	47.4	100.0
	合計	542	100.0	100.0	

問4-1. 習志野市では、発達に課題がある子どもに対する差別や排除(いじめなど)があると思いますか？

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	とてもそう思う	17	3.1	3.1	3.1
	そう思う	110	20.3	20.3	23.4
	どちらとも言えない	161	29.7	29.7	53.1
	そう思わない	94	17.3	17.3	70.5
	全くそう思わない	13	2.4	2.4	72.9
	分からない	147	27.1	27.1	100.0
	合計	542	100.0	100.0	

問4-2. 習志野市では、発達に課題がある子どもに対する差別や排除(いじめなど)が減ってきたと感じますか？

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	とても減ってきた	2	.4	.4	.4
	減ってきた	98	18.1	18.1	18.5
	以前と変わらない	129	23.8	23.8	42.3
	むしろ増えてきた	13	2.4	2.4	44.7
	とても増えてきた	1	.2	.2	44.9
	分からない	298	55.0	55.1	100.0
	合計	541	99.8	100.0	
欠損値	システム欠損値	1	.2		
合計		542	100.0		

問5-1. 習志野市では、発達に課題がある子どもに対する配慮や尊重の風潮があると思いますか？

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	とてもそう思う	21	3.9	3.9	3.9
	そう思う	211	38.9	39.0	42.9
	どちらとも言えない	119	22.0	22.0	64.9
	そう思わない	70	12.9	12.9	77.8
	全くそう思わない	15	2.8	2.8	80.6
	分からない	105	19.4	19.4	100.0
	合計	541	99.8	100.0	
欠損値	システム欠損値	1	.2		
合計		542	100.0		

問5-2. 習志野市では、発達に課題がある子どもに対する配慮や尊重の風潮が増えてきたと感じますか？

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	とても増えてきた	12	2.2	2.2	2.2
	増えてきた	150	27.7	27.7	29.9
	以前と変わらない	119	22.0	22.0	51.8
	むしろ減ってきた	10	1.8	1.8	53.7
	とても減ってきた	2	.4	.4	54.1
	分からない	249	45.9	45.9	100.0
	合計	542	100.0	100.0	

問6-1. 習志野市では、発達に課題がある子どもが社会参加できていると思いますか？

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	とてもそう思う	3	.6	.6	.6
	そう思う	111	20.5	21.1	21.6
	どちらとも言えない	158	29.2	30.0	51.6
	そう思わない	62	11.4	11.8	63.4
	全くそう思わない	18	3.3	3.4	66.8
	分からない	175	32.3	33.2	100.0
	合計	527	97.2	100.0	
欠損値	システム欠損値	15	2.8		
合計		542	100.0		

問6-2. 習志野市では、発達に課題がある子どもの社会参加の機会が増えてきたと感じますか？

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	とても増えてきた	0	.0	.0	.0
	増えてきた	90	16.6	17.1	17.1
	以前と変わらない	116	21.4	22.0	39.1
	むしろ減ってきた	7	1.3	1.3	40.4
	とても減ってきた	2	.4	.4	40.8
	分からない	312	57.6	59.2	100.0
	合計	527	97.2	100.0	
欠損値	システム欠損値	15	2.8		
合計		542	100.0		

問7-1. 学校では、発達に課題がある子どもに対する差別や排除(いじめなど)があると思いますか？

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	とてもそう思う	16	3.0	3.0	3.0
	そう思う	129	23.8	24.6	27.6
	どちらとも言えない	119	22.0	22.7	50.3
	そう思わない	80	14.8	15.2	65.5
	全くそう思わない	9	1.7	1.7	67.2
	分からない	172	31.7	32.8	100.0
	合計	525	96.9	100.0	
欠損値	システム欠損値	17	3.1		
合計		542	100.0		

問7-2. 学校では、発達に課題がある子どもに対する差別や排除(いじめなど)が減ってきたと感じますか？

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	とても減ってきた	0	.0	.0	.0
	減ってきた	83	15.3	15.8	15.8
	以前と変わらない	125	23.1	23.8	39.6
	むしろ増えてきた	15	2.8	2.9	42.5
	とても増えてきた	2	.4	.4	42.9
	分からない	300	55.4	57.1	100.0
	合計	525	96.9	100.0	
欠損値	システム欠損値	17	3.1		
合計		542	100.0		

問8-1. 地域住民の間で、発達に課題がある子どもに対する偏見や誤解があると思いますか？

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	とてもそう思う	24	4.4	4.6	4.6
	そう思う	146	26.9	27.8	32.3
	どちらとも言えない	171	31.5	32.5	64.8
	そう思わない	73	13.5	13.9	78.7
	全くそう思わない	7	1.3	1.3	80.0
	分からない	105	19.4	20.0	100.0
	合計	526	97.0	100.0	
欠損値	システム欠損値	16	3.0		
合計		542	100.0		

問8-2. 地域住民の間で、発達に課題がある子どもに対する偏見や誤解が減ってきたと感じますか？

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	とても減ってきた	0	.0	.0	.0
	減ってきた	72	13.3	13.7	13.7
	以前と変わらない	153	28.2	29.0	42.7
	むしろ増えてきた	14	2.6	2.7	45.4
	とても増えてきた	2	.4	.4	45.7
	分からない	286	52.8	54.3	100.0
	合計	527	97.2	100.0	
欠損値	システム欠損値	15	2.8		
合計		542	100.0		

問9-1. 就労活動では、発達に課題がある子どもに対する差別や排除(いじめなど)があると思いますか？

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	とてもそう思う	22	4.1	4.2	4.2
	そう思う	107	19.7	20.3	24.5
	どちらとも言えない	106	19.6	20.1	44.6
	そう思わない	23	4.2	4.4	49.0
	全くそう思わない	6	1.1	1.1	50.1
	分からない	263	48.5	49.9	100.0
	合計	527	97.2	100.0	
欠損値	システム欠損値	15	2.8		
合計		542	100.0		

問9-2. 就労活動では、発達に課題がある子どもに対する差別や排除(いじめなど)が減ってきたと思いますか？

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	とても減ってきた	1	.2	.2	.2
	減ってきた	41	7.6	7.8	8.0
	以前と変わらない	114	21.0	21.6	29.5
	むしろ増えてきた	7	1.3	1.3	30.9
	とても増えてきた	2	.4	.4	31.3
	分からない	363	67.0	68.8	100.0
	合計	528	97.4	100.0	
欠損値	システム欠損値	14	2.6		
合計		542	100.0		

問 10. 発達に課題がある子どもを持つ保護者にとって、習志野市は、困りごとを相談しやすい環境にあると思いますか？

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	とてもそう思う	40	7.4	7.6	7.6
	そう思う	305	56.3	57.7	65.2
	どちらとも言えない	97	17.9	18.3	83.6
	そう思わない	41	7.6	7.8	91.3
	全くそう思わない	20	3.7	3.8	95.1
	分からない	26	4.8	4.9	100.0
	合計	529	97.6	100.0	
欠損値	システム欠損値	13	2.4		
合計		542	100.0		

問 11. 発達に課題がある子どもを持つ保護者にとって、必要な情報が十分得られていると思いますか？

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	とてもそう思う	9	1.7	1.7	1.7
	そう思う	159	29.3	30.2	31.9
	どちらとも言えない	184	33.9	34.9	66.8
	そう思わない	92	17.0	17.5	84.3
	全くそう思わない	42	7.7	8.0	92.2
	分からない	41	7.6	7.8	100.0
	合計	527	97.2	100.0	
欠損値	システム欠損値	15	2.8		
合計		542	100.0		

問 12. 発達支援にかかわる関係諸機関は、適切な支援や情報提供を行うために必要な連携ができていると思いますか？

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	とてもそう思う	22	4.1	4.1	4.1
	そう思う	254	46.9	47.1	51.2
	どちらとも言えない	118	21.8	21.9	73.1
	そう思わない	73	13.5	13.5	86.6
	全くそう思わない	29	5.4	5.4	92.0
	分からない	43	7.9	8.0	100.0
	合計	539	99.4	100.0	
欠損値	システム欠損値	3	.6		
合計		542	100.0		

問 13. 発達に課題がある子どもが各所属先(保育所、幼稚園、学校など)で持てる力を発揮できていると思いますか？

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	とてもそう思う	27	5.0	5.0	5.0
	そう思う	192	35.4	35.6	40.6
	どちらとも言えない	156	28.8	28.9	69.6
	そう思わない	71	13.1	13.2	82.7
	全くそう思わない	29	5.4	5.4	88.1
	分からない	64	11.8	11.9	100.0
	合計	539	99.4	100.0	
欠損値	システム欠損値	3	.6		
合計		542	100.0		

問 14. 習志野市では、発達に課題がある子どもが安心して就職できる環境があると思いますか？

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	とてもそう思う	2	.4	.4	.4
	そう思う	26	4.8	4.8	5.2
	どちらとも言えない	116	21.4	21.5	26.7
	そう思わない	93	17.2	17.2	43.9
	全くそう思わない	22	4.1	4.1	48.0
	分からない	281	51.8	52.0	100.0
	合計	540	99.6	100.0	
欠損値	システム欠損値	2	.4		
合計		542	100.0		

問 15. 地域住民の間で、発達に課題がある子どもが困ったときに助けてくれる人が増えてきていると感じますか？

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	とても増えてきた	1	.2	.2	.2
	増えてきた	92	17.0	17.0	17.2
	以前と変わらない	125	23.1	23.1	40.3
	むしろ減ってきた	13	2.4	2.4	42.7
	とても減ってきた	5	.9	.9	43.6
	分からない	305	56.3	56.4	100.0
	合計	541	99.8	100.0	
欠損値	システム欠損値	1	.2		
合計		542	100.0		

問 16. 地域住民の間で、発達に課題がある子どものことを正しく理解している人が増えてきていると感じますか？

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	とても増えてきた	0	.0	.0	.0
	増えてきた	106	19.6	19.7	19.7
	以前と変わらない	135	24.9	25.0	44.7
	むしろ減ってきた	14	2.6	2.6	47.3
	とても減ってきた	6	1.1	1.1	48.4
	分からない	278	51.3	51.6	100.0
	合計	539	99.4	100.0	
欠損値	システム欠損値	3	.6		
合計		542	100.0		

問 17. 発達に課題がある子どもが参加できる地域のイベントは十分あると思いますか？

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	とてもそう思う	1	.2	.2	.2
	そう思う	63	11.6	11.7	11.9
	どちらとも言えない	133	24.5	24.6	36.5
	そう思わない	119	22.0	22.0	58.5
	全くそう思わない	28	5.2	5.2	63.7
	分からない	196	36.2	36.3	100.0
	合計	540	99.6	100.0	
欠損値	システム欠損値	2	.4		
合計		542	100.0		

◆最後にご自身のことについてお答えください。

問 18. 性別

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	男性	85	15.7	15.7	15.7
	女性	456	84.1	84.3	100.0
	合計	541	99.8	100.0	
欠損値	システム欠損値	1	.2		
合計		542	100.0		

問 19. 年齢

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	29 歳以下	20	3.7	3.7	3.7
	30 歳代	191	35.2	35.4	39.1
	40 歳代	186	34.3	34.4	73.5
	50 歳代	122	22.5	22.6	96.1
	60 歳以上	21	3.9	3.9	100.0
	合計	540	99.6	100.0	
欠損値	システム欠損値	2	.4		
合計		542	100.0		

※質問は以上です。ご多忙のところ、ご協力誠に有り難うございました。

平成 27 年度
習志野市こどもの発達支援に関する基礎調査実施報告書
平成 28 年 3 月発行

発 行：習志野市
担 当 課：保健福祉部 ひまわり発達相談センター
〒275-0025
千葉県習志野市秋津 3-5-1
電話 047-451-2922
調査委託先：株式会社 公共経営・社会戦略研究所
〒101-8301
東京都千代田区神田駿河台 1-1
電話 03-3296-1151